

平成18年十勝管内農業産出額の推計について

〔平成18年12月20日
十勝支庁産業振興部〕

推計の前提

本推計は、十勝支庁が独自に行ったものであり、北海道農政事務所統計部が公表した関係数値と各農業協同組合、ホクレン農業協同組合連合会及び家畜取引市場等の取り扱い実績並びに市場動向等を勘案して試算している。

平成18年の概要

農業産出額は、昨年を下回る 2,406 億円

今年の農業産出額は、畑作物の不振や生乳の減産等の影響で耕種部門及び畜産部門ともに生産量・額が昨年を下回ったが、野菜・肉用牛の生産販売が堅調に推移し、十勝支庁の推計では過去5番目となる2,406億円の見込みとなった。

(1) 耕種部門

耕種部門では、春先の融雪の遅れによる植付作業の遅れや6月から7月にかけての低温日照不足などにより生育が遅れ、7月下旬以降は天候が回復したものの、全般的に数量が伸び悩み昨年来を下回る作柄となった。

小麦は、一等麦比率は向上したものの収穫量の減から、産出額は昨年を下回る見込み。豆類は、小豆の取引価格が上昇し昨年来を上回る見込みだが、収穫量の減少と大豆の取引価格の下落等により豆類全体では昨年来を下回る見込み。馬鈴しょは、作付面積は増加したものの収穫量の減等により昨年来を下回る見込み。てん菜については、収穫量の減、糖度の伸び悩み等により昨年来を下回る見込み。野菜については、高値取引などにより、昨年来を上回る見込み。

耕種部門産出額 1,219億円(対前年比94.1%)[構成比51%]

(2) 畜産部門

酪農は、飲用向け牛乳の消費低迷による乳価の低下、減産型の計画生産による乳量減少、個体販売も取引価格の低下のため、産出額は昨年来を下回る見込み。

肉用牛は、全般で取引頭数及び価格が堅調に推移し、昨年来を上回る見込み。

畜産部門産出額 1,187億円(対前年比98.8%)[構成比49%]

推計結果

(単位：億円、%)

	平成18年産推計値		平成17年(統情値)		前年対比		
	産出額	構成比	産出額	構成比	増減額	前年比	
耕種	麦類	315	13	328	13	-13	96
	雑穀・豆類	144	6	152	6	-8	95
	馬鈴しょ	260	11	274	11	-14	95
	てん菜	264	11	313	13	-49	84
	野菜	220	9	210	8	+10	105
	その他	16	1	18	1	-2	89
	小計	1,219	51	1,295	52	-76	94
畜産	酪農	844	35	878	35	-34	96
	生乳	704	29	725	29	-21	97
	肉用牛	284	12	262	10	+22	108
	豚・鶏	53	2	57	2	-4	93
	その他	5	0	6	0	-1	83
小計	1,187	49	1,202	48	-15	99	
総合計	2,406	100	2,497	100	-91	96	

注 1) 平成17年の農業産出額は、農林水産統計の概数値による。

2) 四捨五入の関係で、内訳と小計、総合計は必ずしも一致しない。

耕種部門別動向

小麦

作付面積は、昨年を1,500ha上回る47,700haであった。

生育は、6月の低温、日照不足などにより4～8日遅れで推移し、その影響により粒数が少なかったこのため、単収は昨年より54kg下回る446kg/10aとなり、収穫量では昨年を18,000t下回った。一等麦比率は昨年に比べ向上したものの産出額は昨年を下回る見込み。

豆類

作付面積は、昨年を1,600ha下回る23,040haであった。

作付面積・収穫量の減、大豆の価格の下落により産出額は昨年を下回る見込み。

・大豆

作付面積は、昨年を430ha上回る5,140haであった。

生育は、6月の低温、日照不足などの影響を受けたが8月以降は好天に恵まれ生育は順調に回復した。

作付面積は増加したが収穫量が昨年を下回ることや、約4分の1を占める黒大豆の価格が大幅に下落していることなどから、算出額は昨年を下回る見込み

・小豆

作付面積は、昨年を1,200ha下回る10,700haであった。

生育は、6月の低温、日照不足などの影響を受けたが8月以降は好天に恵まれ生育は順調に回復し、単収は平年を上回った。

作付面積の減少により収穫量は昨年を下回ったが、取引価格が昨年に比べ上昇していることから、産出額は昨年を上回る見込み。

・いんげん

作付面積は、昨年を830ha下回る7,200haであった。

生育は、6月の低温、日照不足などの影響を受け、8月以降の好天により生育は回復したものの、単収は平年を下回った。

作付面積と単収の減少により収穫量が昨年を下回ることから、産出額は昨年を下回る見込み。

馬鈴しょ

作付面積は、昨年を500ha上回る23,600haであった。

生育は、融雪の遅れ等による植付作業の遅れ、その後の天候不順、8月以降の少雨になどの影響により、総じて小玉傾向となった。

作付面積は増加したものの収穫量が昨年を下回り、産出額は昨年を下回る見込み。

てん菜

作付面積は、昨年とほぼ同じの29,440haであった。

生育は、融雪の遅れ等による植付作業の遅れや、その後の天候不順により2日～6日遅れで推移したが、8月以降の好天により回復したが、総じて小ぶり傾向となった。

収穫量の減及び糖度の伸び悩みにより産出額は昨年を下回る見込み

野菜

6月の低温多雨、8月の雨不足などにより、主力野菜の収穫量が減少した。

昨年に引き続き長いもの取引価格が低迷しているが、7月の本州、九州などでの長梅雨や大雨の影響から、人参、大根、白菜、キャベツなどの作物が比較的高値で取引され、産出額は昨年を上回る見込み。

畜産部門別動向

酪農

生乳については、飲用向けの減少などから乳価が低下しており、減産型の計画生産により、生産乳量も減少していることから、産出額は昨年を下回る見込み。

個体取引については、生乳減産による導入頭数の減少により、取引価格が低下しているため、産出額は昨年を下回る見込み

肉用牛

(子牛・素牛)

肉専用種については、取引単価が昨年を上回っており取引頭数も増加しているため、昨年を上回る見込み。

乳用種については、家畜市場における取引頭数が昨年をかなり上回っており、単価がほぼ前年並みを維持しているため、昨年を上回る見込み。

(肥育牛)

肉専用種については、枝肉価格が前年並みであるものの、と畜頭数が増加しているため、昨年を上回る見込み。

乳用種については、枝肉価格、と畜頭数ともに堅調に推移したことから、昨年を上回る見込み

これにより、肉用牛部門全般で産出額は昨年を上回る見込み。

豚

と畜頭数、枝肉価格とも前年を下回っており、産出額は昨年を下回る見込み

鶏

採卵鶏、肉鶏とも飼養羽数は増加したものの、鶏卵、鶏肉とも取引価格が低下したことなどから、産出額は昨年を下回る見込み。